

人とのかかわりをもつ力が育つための援助の工夫

——園生活を通して——

目 次

I	テーマ設定理由	1
II	人とのかかわりをもつ力が育つ意義と基礎となる事項	2
	1 人とのかかわりをもつ意義	2
	2 人とのかかわりをもつ力が育つ基礎となる事項	2
III	人とのかかわりをもつ力が育つ過程	2
IV	人とのかかわりをもつ力が育つ要因とその援助	4
	1 教師との信頼関係を築くこと	4
	2 自分を表現する言葉を獲得すること	6
	3 環境（人・物・場所）から感じとること	6
	4 多様な感情体験をすること	8
	5 イメージの世界を味わうこと	11
	6 家庭との連携を密にすること	13
V	園生活における触れ合いのポイント	17
VI	研究の成果と今後の課題	20
	参考文献	20

浦添市立牧港幼稚園教諭

比 嘉 悦 子

人とのかかわりをもつ力が育つための援助の工夫

——園生活を通して——

浦添市立牧港幼稚園教諭 比嘉悦子

I テーマ設定の理由

幼児は入園すると、その日から新しい人間関係としての教師や他の多くの幼児たちと親しみ、支えあって生活をしていくことになる。つまり、新しい環境の中で、多くの人とのかかわりが、必要となる。幼稚園は、家庭を離れて社会生活をスタートさせる場であり、社会生活の自立を促す場でもある。

幼児が、園生活を楽しく、有意義に過ごすことによって、人とのかかわりをもつ力を育て、社会の一員としてその時期なりの自立心を育てることは、教師の大切な役割である。

人とのかかわりをもつ力は、教師や他の多くの幼児と出会い、さまざまな体験をしていく中で養われる。

これまでの私の保育を振り返ってみると、子ども一人一人に「自分のことは自分ででき、友だちとかかわって元気いっぱい遊んでほしい」と願いながらも一人一人の育ちをみると身のまわりのことが自分でできない子、友だちとかかわれない子、遊べない子の姿がみられる。

それはなぜなのか、考えてみると入園当初の子どもたちとの出会いの時期に一人一人への充分なかかわりが少なかったこと。また、毎日くり返す生活習慣を子どもと共にしてやることも少なかったのではないかと。今一度、子どもの育つ過程を学び、教師がもっと深く一人一人にかかわることで安定した充実ある園生活を送ることができるのではないかと思われる。

実践においては、指示する言葉が多く、教え込もうとする傾向にあり、そのため子どもたちが自分で考えて行動するしようとする芽を摘みとっていたのではないかと思われる。

そこで、

1. 人とのかかわりをもつ力が育つ過程を見通し援助の手だてを工夫する。
2. 人とのかかわりをもつ力が育つ要因をとらえ、その援助のあり方を考える。

以上の事を研究することにより、子どもたちに人とのかかわりをもつ力が育ち、充実した園生活を送ることができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 人とのかかわりをもつ力が育つ意義と基礎となる事項

1 人とのかかわりをもつ力が育つ意義

人間はどの時期にあっても、他の人と親しみ支え合って生活していく。そのためには自立心を育て、人とのかかわりをもつ力を養う必要がある。

幼児は園生活の中で、教師や他のすべての幼児とかかわる中で次の事が育っていく。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">(1) 教師との信頼関係ができてくると、自分の力でさまざまなことを行うことができるようになり充実感を味わうようになる。(2) 多くの他の幼児や教師と触れ合う中で、自己の存在感や自分とは違ったさまざまな人への |
|--|

積極的な関心、共感や思いやりなどをもつようになる。

- (3) 自分の感情や意思を表現しながら、他の人々と共に生活する楽しさや大切さを知るようになる。
- (4) 他の人々と生活するために必要な習慣や態度を身につけていく。

2 人とかかわりをもつ基礎となる事項

人とかかわりをもつ力は、自分の意志や感情を豊かに表現したり、相手の気持ちを感じとることを十分に経験することにより養われる。

幼稚園においては、生活全体の中で、十分に友だちと触れ合い豊かな感情を得られるようにすることと共に自分の感性や意思を表現したり、他の幼児と共感し合えるような活動を重視し広い意味でのコミュニケーション能力を育てることが重要である。

そこで、人とかかわりをもつ基礎となる事項として次のことが考えられる。

- (1) 人々に温かく見守られているという安心感をもつ。
- (2) 人に対する信頼感をもつ。
- (3) 自分自身の生活を確立する。
- (4) 人への積極的な関心、共感をもつ。
- (5) 思いやりの気持ちをもつ。
- (6) 生活に必要な習慣や態度を身につける。

Ⅲ 人とかかわりをもつ力が育つ過程

人とかかわる力の育ちは、自分の周囲の人々にあたたかく受け入れられているかどうかにかかっている。つまり、自分が受容されているという実感の上に立ってはじめてかかわりが成り立ってくるのであるといえよう。これまでの人とかかわりの育ちに関する考え方の場合は、「誰とでも仲良くする」などということが目標化され、仲間ですぐ順応するような姿勢をもつことがいい子ども、社会性の育っている子どもと考えられていた傾向がある。そのような目標に向かって考えることを避け、人とかかわりは、まさに信頼関係、そして支え合って生活すること、そしてまた自分から人とかかわって生きていく力を、行動力をもつこと。こういう育ちの過程を考えていくことであろうと考える。子どもの発達を決してスムーズではなく試行錯誤の過程であると思われる。そこで人とかかわりをもつ力が育つ過程を次のように促えてみた。

<人とのかかわりをもつ力の内容>

<人とのかかわりをもつ力が育つ過程>

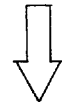
- ・教師の愛情を感じる。 “せんせい、おかあさんみたい”
- ・自分以外の友だちの存在に気づく。 “この子〇〇ちゃんていうんだ”
- ・自分以外の友だちと遊びたくなる。 “あの子とあそびたい”
- ・周りがどんなものかを感じる。 “どんなことをしてもいいんだ”

一人が自分なりの幼稚園での過ごし方を感じる力を身につける。



- ・教師と自分との関係が安定する。 “せんせいってわたしのことわかってくれるんだなー”
- ・自分と友だちとの違いに気づく。 “なんでわかんないの！”
- ・自分がどう動いたらよいか感じとる。 “～おもしろう！、～やりたい！”
- ・自分のやりたいことが意識される。 “私たち～なの、ここは～なの”

生活や遊びの中で、友だちの存在を感じる力を身につける。



- ・教師に対して何でも言える。 “せんせい～しようよー”
- ・友だちと一緒にいる心地よさを感じてくる。 “〇〇さん続きしよう”
- ・自分と友だちとの違いに気づき認めようとする。 “〇〇ちゃんってこんなこと上手だね”
- ・経験や体験をためこんでくる。 “一人になっちゃった”

友だちの中で自分がどう動いたらよいか感じ取る力を身につける。



- ・以前との違いに気づく。 “ここであそんでもいいのかなー”
- ・自分なりに不安を取り除こうとする。 “〇〇さんとあそびたいなー”
- ・相手のことをより知ろうとする。 “〇〇くんと一緒に遊ぶと楽しい”
- ・何とかしようとする気持ちになる。 “これをこうしたいの！”
- ・ “どうすればいいの？”

友だちのことをよく知ろうとしたり、自分のことを知ってもらおうとする力を身につける。



- ・かかわるきっかけを自分でつくり出す。 “ねえねえ、あっ同じだね”
- ・自分たちで遊びをすすめていこうとする。 “今日は〇〇しよう”
- ・自分を知っていく。(自信をもつ) “もっとがんばろう”
- ・友だちの良さや違いも認め、受け入れていく。 “〇〇さんいい考えだね”

友だちの気持ちや状況を感じ取り自分を調節していく力を身につける。



- ・言葉で自分の思う事を伝えたり受け入れられたりしながら分かり合おうとする。 “ねえ、ここは〇〇のことにしよう”
- ・自分からやってみようとする意欲がある。 “自分たちでやりたい”
- ・自分たちでやったという満足感を味わう。 “こんなことしよう”
- ・ “できるんだよ”
- ・ “やった！”
- ・自分の良さや友だちの良さに気づき、互いに尊重する。 “〇〇くんってこんな時に助けてくれるんだ”

友だち同志お互いに分かり合い尊重していく力を身につける。

IV 人とのかかわりをもつ力が育つ要因とその援助

1 教師との信頼関係を築くこと

子どもは教師とのかかわりの中でさまざまなことを体験し学ぶ。幼児にとって教師の存在は不安な時の安全基地であり、またともに遊ぶ遊び相手でもある。そこで教師は幼児一人一人の気持ちやねがいをつかみ、発達の違いを認めながら、子供に応じた援助をしていくことが大切である。

「先生がいつも自分を見ていてくれる。多少まちがったことをしてもそれを暖かく見守っていてくれる。」という安心感。

「あなたは自分でやれる力があるんだ。自分でやっごらん、もし困った事があればいつでも手助けしてあげよう。でも手助けしなくてもあなた自身の手でできる。」という信頼感。

このような事を一人一人の子どもと相互の信頼関係の中で伝えていきたい。

(1) 実践例

① 教師との信頼関係に支えられて遊びが発展していったK君

<K君のこと> 語彙が豊かであり、教師にもよく話しかけてくる。怒りっぽいところがあり、教師が他の子とはなしている最中でも「センセイ、センセイってば～」と怒り出す。身体が肥満ぎみであり、体を動かして遊ぶ事を好まず、室内で粘土遊びをすることが多い。

いつもは室内で遊んでいることが多いK君がぞうりにはきかえて玄関から出て来たところへ担任と出会い「せんせい、あそぼう」とはなしかけてきたことによっにかかわりがはじまる。

遊 び の 展 開	教 師 の 援 助
<ul style="list-style-type: none"> ◦ スキップをしながらわくわく広場へ行く ◦ 「せんせい色水やさんしたい。」と自分から遊びを始める。 「せんせい、びんを取ってくるね」ジュースのびんをもってくる。草や草花をびんの中へ入れびんをふったりして色水に変わる様子を見ている。 ◦ T男と一緒に加わってあそびはじめる。 T男が加わって遊びはじめたことで棒でつ 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 「せんせいあそぼう。」とはなしかけてきたことを受けとめ、「うん、あそぼう。」と返事をしてわくわく広場へ出かける。 ◦ 「ぞうりにはきかえてきたの～、これならみずにぬれてもへいきだね。」とほめてあげる。 ◦ そばへ行ってのぞいたり、どのように色水を作っていくのかその様子を見守る。 (色水遊びの経験が少ない為遊びの中身が浅いけれどもあえて口をはさまず見守ることにする。

遊 び の 展 開	教 師 の 援 助
<p>ついたり、砂をませたり等自分達で工夫したりしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ となりでままごと遊びをしている女の子のパーチメント紙を使ってきれいな色のコーヒーをみて興味をもち、「何でつくったの？」ときいている。 ◦ 女の子たちからパーチメント紙のことやどこでもらったのかをきいてさっそく職員室のM子先生のところへもらいに行く。 ◦ さっそくパーチメント紙を使って色水を作り本人も満足している。 センセイ、みて!!みて!!といいながら見せにくる。 ◦ 自分で作った色水のはいったびんを大事そうにかかえてのびのび広場へやってくる。 <ul style="list-style-type: none"> ◦ T男が太鼓橋のうでこうもりのかっこうをしてみせる。 ◦ T男の刺激を受けて自分のにがてな太鼓橋にぶらさがり足をかけようと何度も挑戦する。 ◦ 色水がこぼれそうになったので教室もっていきながら「せんせい、なわとびやりたいからなわをもってこようね」と自主的にとりに行く。 ◦ Y男もいっしょにやりたいという事でやってくる。 ◦ 2回飛びから7回までできるようになる。 ぞうりをぬいではだしでやった方がよくとべるとはだしでがんばる。 ◦ H男・K男・T男なども加わり挑戦する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 「ほんとだ。きれいな色だね」と共感し「何でつくったの?」というK君の質問をききながら「いいことに気がついたね」と目であなずく。 <div data-bbox="771 407 1157 864" data-label="Image"> </div> <ul style="list-style-type: none"> ◦ T男が太鼓橋にぶらさがりこうもりをしてみたのでとてもほめてあげる。 ◦ 挑戦しようとしている気持ちを認めはげます「すごい!だんだんうでの力が強くなっているよ」とはげましながら足をつかまえてかけることを何度もやってあげる。 ◦ 連続して2回飛べたことをとてもほめてあげ次は3回、次は4回と目標を示しながら挑戦させる。 ◦ 教師が他の子とはなしている時にすぐ自分の事をはなしかけようとするので、待つように言葉かけをする。 ◦ 一人一人の園児のなわとびを数える場面でも「あっ、今は、まっておくんだ。」と口に手をあてる場面も2~3回みられたのでほめてあげる。

<考 察>

- 幼児は教師が自分の事をみていてくれるという安心感があると、自分から遊びを展開していけるものと思われる。
- 教師の援助は認める、見守る、うなずく、笑い合う、共感する、はげます等、一人一人に合った援助があり、それを積み重ねる事によって信頼関係が築かれていくと考える。

2 自分を表現する言葉を獲得すること

人とのかかわりをもつ上で、言葉で自分を表現することはとても大切である。“言葉”とは話し言葉だけでなく、表情や動き、態度なども、幼児期には大切な言葉であると考えられる。

幼児は教師や友だちの中で、自分の思いや感じたことを言葉に表す。そして、それに対する相手の反応によって考えたり、行動したり、言葉に出したりしていくのである。このように相手との相互作用を繰り返してかかわりを深めていく時に、言葉は大きな役割を果たしている。また、幼児の思いが複雑になり、相手が多様になっていくに従って、体言葉では伝えきれなくなり、相手にわからせる必要が出てくるため、相手に伝わる言葉による表現が一層重要になってくる。幼児は人とのかかわりの中で、自分なりの言葉を獲得していくものと思われる。

さらに、友だち関係が深まり、相手がよくわかってくると、お互いに通じ合う言葉ができたり、表現が部分的に省略されたりする姿も見られ、言葉と人とのかかわりは密接にかかわり合っている。

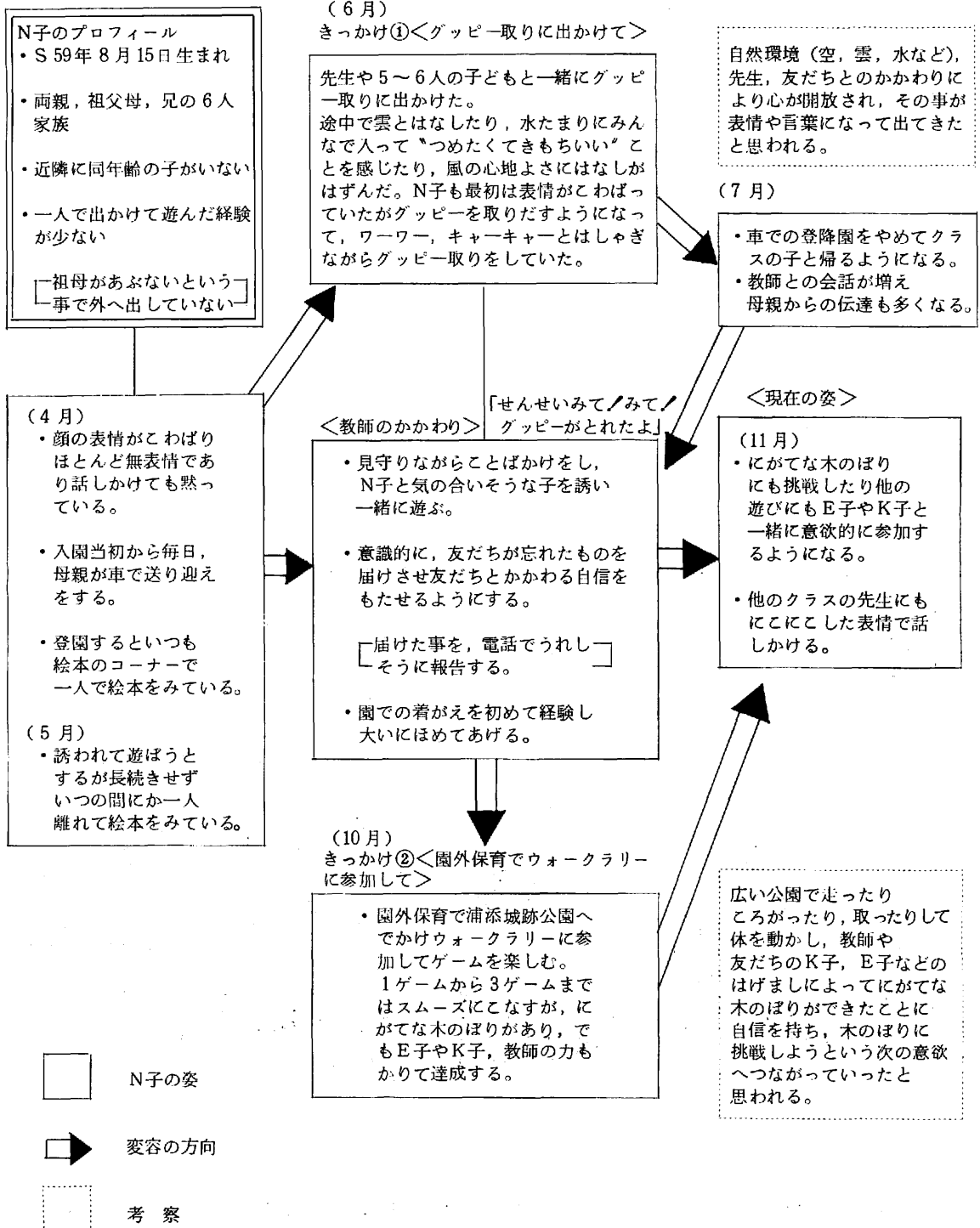
3 環境（人、物、場、状況）から感じとること

幼児は、情緒が安定し教師との信頼関係ができてくると、やがて自分のまわりの友だちや物・場の雰囲気等を感じとり、自分なりにかかわっていかこうとする。その環境とのかかわりによって、自分の興味や欲求を満足させ自己充実していく。また、次の課題を見い出してもいく。このように幼児は、何げない人や物との出会いから活動が生まれ、まわりの大人の一言でイメージをふくらませ、次々と遊びを展開していく。園生活の中で一人一人が自己充実していくためには、幼児が思わず～してみたいと思うような心が揺り動かされるような環境を作り出していくことが大切である。



(1) 実践事例

① 「せんせい みて／みて／」グッピー取りにいったのをきっかけに教師や友だちとのかわりができたNちゃん



4 多様な感情体験をすること

幼児は友だちや周りの人々とかかわりの中で、気持ちのぶつかり合いを繰り返して経験し様々な感情を体験しながら生活している。そして、その感情を動きや言葉で表わすことによって相手に伝えようとし、相手がそのことに対応することによって次のかかわりが生み出される。

そのような感情の受けとり方や表現のし方は、どの幼児も同じではなく、一人一人の持っている個性によって異なるのであり、それぞれの幼児の特性を大切にしていく必要がある。そしてさまざまな感情を体験させ、それをのびのびと表現できるようにしていくことが、かかわりを深めていく手助けとなると思われる。

多様な感情体験をすることで育つもの

- ・表現が豊かになる
- ・相手の気持ちがわかる（共感できる、思いやる）
- ・感情のコントロールができるようになる（内面化する、穏やかになる、我慢する）

「感情」についてのとらえ方

幼児のさまざまな場面での心の動きを、表情や言葉、行動などから推測し、「感情」とは、ひとつの出来事に対する心の揺れ動きであるにとらえた。



ひとつの出来事でも、一人一人によって思い（感情）や表現は、色々と違うことがわかる。

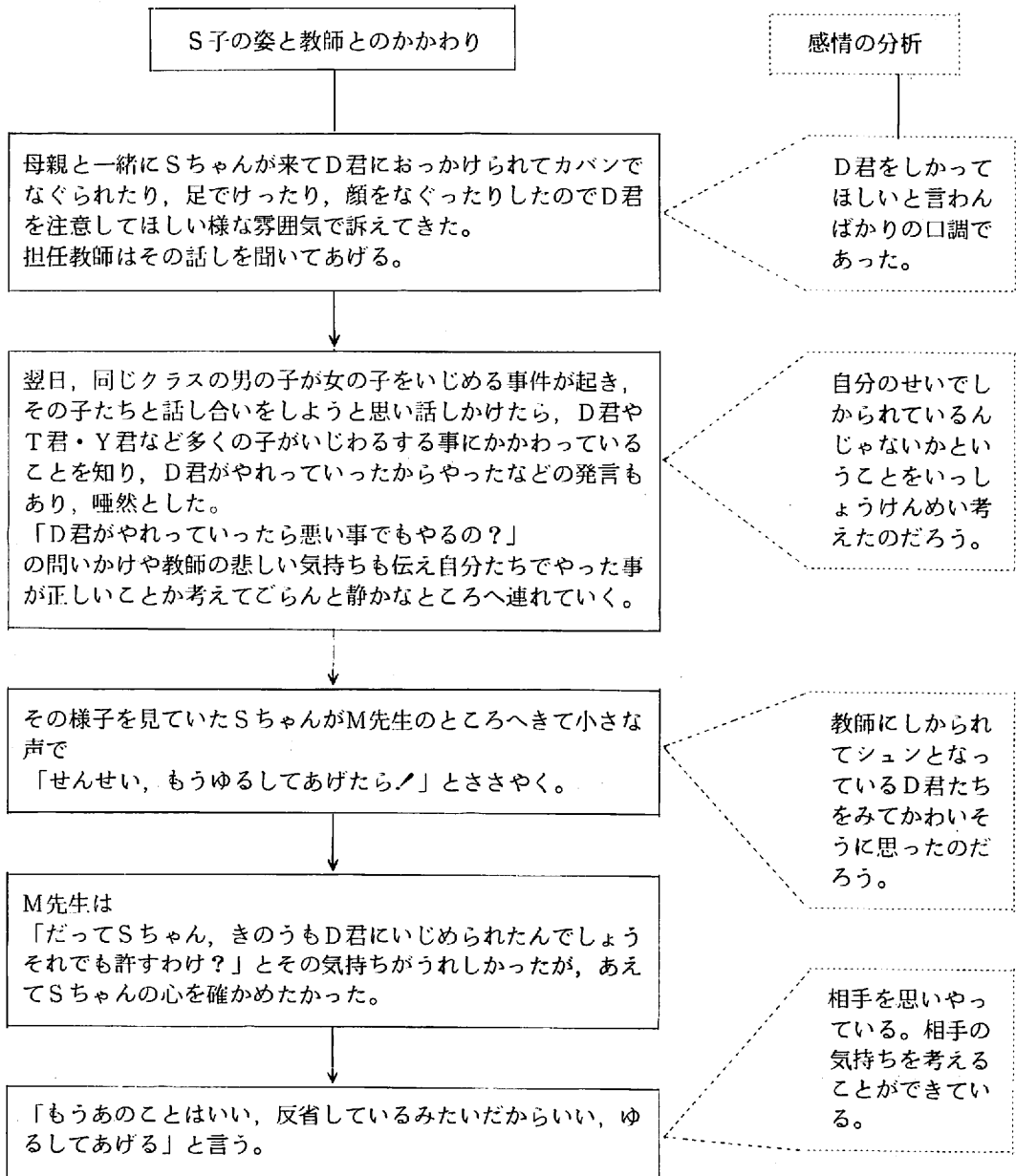
（参考資料：東京都台東区立根岸幼稚園研究紀要）

(1) 実践例

① 「せんせい、ゆるしてあげたら！」

。ある出来事を通してさまざまな感情体験をしたS子

<S子のこと> 日頃、「〇〇ちゃんがいじわるするよ!」「〇〇ちゃんが髪をひっぱる」「足が痛い」「目が痛い」などと訴えてくるのが多いS子である。気がつよいところもある。



M先生と一緒にE先生のところへ話しに行く
「Eせんせい、もうあの子たちを許してちょうだい。」とSちゃんが頼む。

E先生は
「Sちゃん、先生も許してあげたいのよ、でもね、先生だってつらいけど、小さいときにいじわるむしさんを直しておかないとなおらないのよ。だから先生もつらいけどしかっているのよ。いじわるさんになると、おとうさんやおかあさんが悲しむでしょう。」とはなす。

大人のつらい気持ち（大人はつらいけどしからなくちゃいけないときがあること）を知る。大人の気持ちを考えられる。

E先生の話して納得した様子だったが、D君たちのいるところから離れようとしなかった。

その後、D君たちが許されるとホッとしたらしく遊びに出かけていった。

相手を思いやるうれしい気持ちで安心したのだろう。

翌日 Sちゃんのお母さんから手紙が届く
お母さんからの手紙

いろいろ、御苦労おかけしてすみません。「Dちゃんたち、ないてたよ おかあさん！ かなしいかおして、S子、さびしかった！」

「しかられたからかな……だけどしかる時大人もつらくなるんだよ。だけどおはなししないとおしえないといい事も悪いこともわからない人になっちゃうからね。お母さん、お父さんお兄ちゃんたちが家では教えて、幼稚園では先生が教えてくれるんだよ」

「S子の歯うごいていたから、パンチ（D君にたたかれたこと）のおかげで歯医者さんいかないでとれたからバンザーイ、E先生がいっぱいはなしてくれたから、かあさん、もうおこらないでよね」と会話をしました。
(原文通り)

< 考 察 >

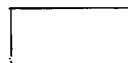
- ・ SちゃんがD君にたたかれたことをきっかけに不安な気持ちになったり、相手の事を思いやったり、さびしい気持ちを味わうなど、いろいろ葛藤する中で“せんせい もうゆるしてあげたら”と教師に訴える行為になったとおもわれる。さらに大人もしからなければならぬときがある事を知っていったと思われる。
- ・ 「S子の歯はうごいていたから、パンチ（D君にたたかれたこと）のおかげで歯医者さんにいかないでとれたからバンザーイ。」と母親にはなすところはマイナスの思いをプラスの思いにかえていてすばらしいと思う。

5 イメージの世界の楽しさを味わうこと

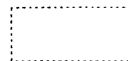
幼児は遊びの中で友達とさまざまな体験をしていく。幼児がかかわり合って遊ぶには、互いに同じような遊び欲求や興味をもち、遊びのイメージを共有することで、かかわり合って遊ぶことができる。中でも、ごっこ遊びでは、自分達を「お父さん」「お母さん」「先生」等、日常生活で接している人や憧れているものなどを実現させ楽しんでいる。ごっこ遊びでは、イメージの世界の中で安心して自分を表現することができる。幼児が役割になりきって考えたり行動したりすることによって、相手の気持ちに気付いたり、それに添うように動いたりすることが自然に行われていく。ごっこの中でイメージを使って遊ぶことにより遊びが充実し一人一人の幼児が充実感や満足感を味わうことができるので、人とのかかわりも、より楽しい経験として蓄積されることになる。

① 実践例

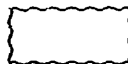
くじびきやからくじびきレストランへ（平成2年11月）



活動の説明



考 察



教師の援助

雨天のため、戸外へ出られず室内で遊びをはじめた事からくじびきやが展開する。

- ・「くじ引きをやりたい。」と言う子どもからの発言でくじ引きの箱とくじ引き券をつくりはじめる。
- ・カンバンもほしいという事で脚立を運んできてカンバン作りも始まる。
（脚立はカンバンをかける時に使うとの事）
- ・「すべり台もあった方がいい。」という事から巧枝台を組み立ててすべり台にする。

「せんせい、くじびきにたった人は牛乳もあげることにしよう」

と言って牛乳を運んでくる。自分のクラスのみだけでなく4クラス分運んできてクラスでの表示もしている。

くじびきやをイメージし役割分担したり、すべり台もあった方がいい、牛乳もあげることにしよう等、あそびを充実させようとしている。

教師は準備を手伝ったり作るのを見守る

「せんせい、おきゃくさんよんでくるね」
「くじびきやにきてください～」
「牛乳もあたるよ～」
「すべり台もすべれるよ～」
「いらっしゃいませ いらっしゃいませ
くじびきやでございます」
「あたりの方は、すべり台をすべって
牛乳をのんでください」

各クラスを
回って
よびかける

あたった子に対してかけ声もいさましく

「おめでとうございます。こちらへ どうぞ！」と
テーブルへ案内する。

はずれの子に対しては

「ごんねんでした。またどうぞ。」

あいこの子に対しては

「もう一回チャンスがありますからひいて下さい。」

3回ぐらいはずれて、泣きべそをかいている子に対しては

「だいじょうぶ！だいじょうぶ！くじ引き券みえるからさー
ちょっとのぞいてから引いたら！」と、アドバイスする。

・後日、すべり台が飛行機にかわったり船に変化したりしてくじびきやが発展する。

大ぜいの人とかかかわると楽しいという思いが他のクラスへの声かけという行動にあらわれている。

教師もお客になって遊びに加わる。

はずれの子に対するやさしい気持ちがあらわれている。

大丈夫だからと安心感を与えチャンスを作ってあげている。

< 考 察 >

- ・直接的な教師の援助はないが、人、時、場、空間を保障して子どもたちのうごきを見守ることも教師の大切な役割ではないかと思われる。
- ・子どもたちの遊びの中の言葉のやりとり等を聞いていると、日頃の教師の生活経験や感性が子どもに影響を与え、イメージの世界を豊かにするとともに思いやりやいたわりの気持ちを育てることもつながっていくのではないかと思われる。

6 家庭との連携を密にすること

幼児の生活は、家庭、地域社会、幼稚園と連続的に展開されている。幼児の家庭や地域での豊かな生活経験が、幼稚園で教師や他の幼児とかかわり生活していく中でさらにふくらんでいく。そして、その事がまた家庭や地域社会での生活に生かされていく。そういう中で幼児の望ましい発達を促されていくと考える。

4月。幼稚園へはじめて家庭を離れた子どもたちがやってくる。新しい環境に入るため、どの子どもも不安定な状態になる。ちょっとした事にすぐ泣き出したり、頑固に拒否したりする子どもいる。登園を嫌がったり、園へ来ても部屋に入るのを嫌がったりする子どもいる。そういう不安定な子どもも含めて一人一人の幼児の情緒を安定させ、園生活を楽しいものにしていくために家庭との連携を十分にとっていく必要がある。

(1) 学庭との連携の方法

- ・園だよりの発行
- ・学級だよりの発行
- ・学級懇談
- ・教育相談
- ・保育参観・保育参加
- ・連絡メモ・電話連絡による効果的活用

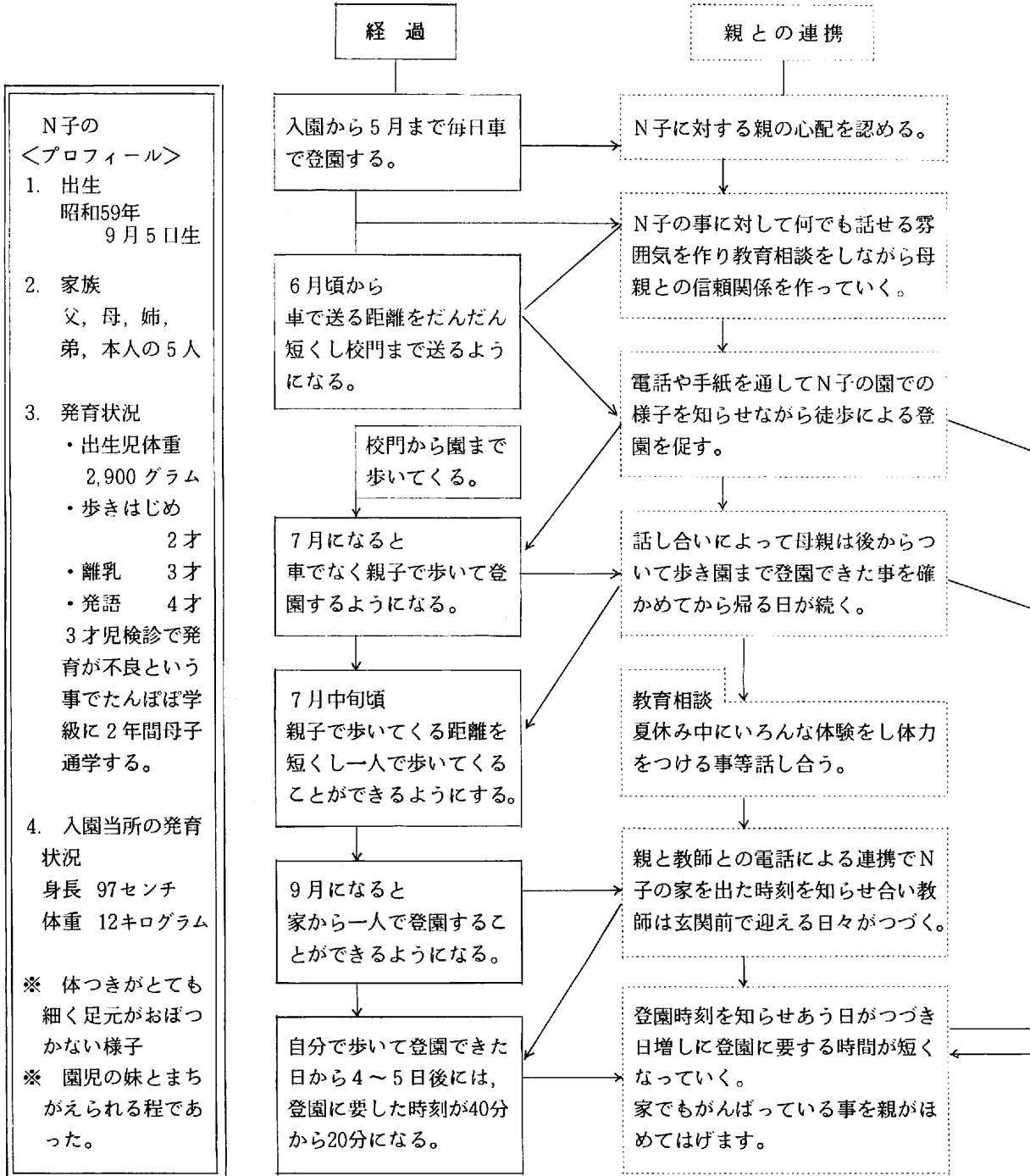
(2) 留意点

- ・教育方針や目標、行事など園生活の全体的な取り組みや保育計画を伝えて、理解をし、協力してもらう。
- ・学級の子どもたちの育ちの様子や保育計画、お知らせや協力願いなどを載せて連携を図る。
- ・「〇〇に気をつけさせて下さい。」「〇〇を持たせて下さい。」など親への事務連絡や諸注意が中心にならないように、生き生きとした子どもの姿を具体的に伝える。
- ・保育参観や保育と一緒に参加してもらう日を設け、幼児理解をしてもらう。
- ・学級懇談や、教育相談を通して、一人一人悩みや問題点を聞いてあげる。

(1) 実践例

① 「Nちゃん、きょうもつよいあしであるいてきました」

・家庭との連携により、一人で登降園ができるようになり、意欲的になったNちゃん。



N子の育ち

教師の援助

他の友だち



駅伝大会で
みごとにが
んばるNち
ゃん。

「おねえちゃんが〇〇して
あげるからね」と言って
よく面倒をみる。
妹のような気持ちで
かかわっている。



(Nちゃんががんばったね!)

「Nちゃんは強い
足になりたいから
歩いてくる。」と
歩いてくる事に
意欲を示す。

Nちゃん、足が強く
なりたいたったら
明日から強い足で
歩いてこようね。」
と約束する。

「Nちゃんは
強い足で歩いて
きたよ。」

足をさすりながら
「わぁ、すごい!!きんにくが
ついてつよくなっているね~」
と はげます。

「ほんとだ~
Nちゃんの足
きんにくがついて
きたね~」

「おはようございます
Nちゃん今日も強い
足で歩いてきました。」

Nちゃんが強い足で
歩いてこれた事を、
まわりの友だちや先
生に知らせ、大げさ
にはめてあげ、よろ
こびをわかち合う。

Nちゃんのがんばりに
共感する。

毎日はりきった声で
玄関で挨拶する。
その表情は生き生き
し自信にあふれている。

園の友だち、先生方、Nちゃんと
喜びをわかち合う。

「Nちゃん、早く
ようちえんにこれる
ようになったね~」



<考 察>

- ・園、担任、家庭の連携により、Nちゃんの車による登園から自分の足であるいて登園することができるようになり、その事がNちゃんに大きな自信を与えたと思われる。
- その事によってうんてい、なわとび、竹馬など、今まで興味を示さなかった事へ挑戦する姿もみられ、意欲的にかかわろうとするようになる。

V 園生活における触れ合いのポイント

一人一人の子どもと保育者がいっしょになって創り出す園生活。日常生活の中でどのように子どもたちと過ごしていけばよいか、どのような生活を創り出せば子どもたちが豊かな園生活を営むことができるのか、1日の園生活における活動の意義や触れ合いのポイントを押さえてみることにした。

活 動	活動の意義及び教師の留意点
登 園 時	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 家から園まで <p>近所の友だちと一緒に来る子、兄弟と仲良く来る子、親に手をひかれて来る子親から離れるのが淋しくて泣いている子等、入園当初は様々な姿がみられる。一人一人の思いや願いが皆違うんだという事を受け止め、次第に「きょうは〇〇さんと△△してあそぼう。」と胸をふくらませて登園するような朝を迎えさせたい</p> ◦ 玄関で <p>入園当初は特に一人一人の子供を玄関で迎え、情緒の安定をはかるように心がける。この時にくつのしまい方やうわばきはき方について一人一人を認めたり指導したりする。くつ箱の名前と自分のくつの置き場所について、はやめにわかるように工夫する。</p> ◦ あいさつ <p>「おはようございます」と元気な声でやるあいさつ。「ニコッ」と笑うあいさつ。「ちょこん」と頭を下げるあいさつ。「せんせい！」というあいさつ。はじめはその子なりのあいさつを受けとめながら出会いを大切にす。あいさつをするのは気持ちのよいことだと、体験を通して理解できるように援助したい。除々に担任以外の先生や、友だちにもできるようになってほしい。</p>
学 級 で	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 出席ノートに印鑑を押す <p>幼児にとっては最初の活動であるので大切にしたい。入園当時は、「きょうも元気にきたね。印鑑を押してあげようね。」等と一人一人と話しをしながら一緒に印鑑を押すようにする。日にちに関心をもたせたり「どこに押すの？」と教師や友だちに聞く等コミュニケーションを活発にする。「じょうずに押せるようになってるね。」と一人一人の成長の様子も知ることができる。</p> ◦ 持ち物の始末 <p>入園当初は各自の持ち物の置き場所を確認させ、カバン・帽子・制服等、それぞれの仕方に応じた始末ができるように教える。これらの活動を教師と幼児が触れ合う場としてとらえ、その中で心のつながりができるようにし、結果として、幼稚園での生活の仕方が身につけていけばよいといった考え方で援助することが大切である。</p>

活 動	活動の意義及び教師の留意点	
当 番	<ul style="list-style-type: none"> 当番活動とは、保育の中で、一つの仕事をみんなで順番に受けもって活動することをいう。園では、飼育、栽培、おやつ、弁当会などの当番活動を取りあげている。はじめは、教師がやるのを一緒に手伝うことで安定させたり、教師が喜んで働く姿をモデルとして子どもに見せながら、自発的に手伝うようにしむけていく。そして徐々に当番活動につなげていくようにする。 教師も共に、掃除やえさやり、水かけなどをしながら動植物とのふれ合いを大事にし、親しみやいたわりの気持ちを育てていく。 	
遊 び	<p>遊びへの援助</p> <p>遊びとは、子どもの生活の大部分をしめる、子どもの自発的な活動の総称である。</p> <ul style="list-style-type: none"> 一人一人の幼児が自分なりの遊びを見つけ出せるようにしていきたい。 教師は子どもの求めているものを子どもと一緒に模索したり、子どもの必要に応じて一緒に活動して手助けしたり、喜びを分かち合ったり、子どもと共にうれしい気持ちを十分に味わうようにしていきたい。 自分で遊びをみつけきれずにウロウロしたり、ぼんやりと座り込んでいたりする子もいる。しかし、それはそれなりに他児のあそびをみることが楽しい、とか、なにをして遊ぶかと考えている最中であったり、子どもなりの理由がある。そういう子どもを無理やり遊びに引っぱったりせず、やさしく見守り、話かけたり、時には誘い込んだりする。次第に友だちと遊ぶ楽しさを味わってほしいと考える。 	 

活 動	活動の意義及び教師の留意点
降 園	<ul style="list-style-type: none"> ・ “明日また会おうね”という気持ちで別れたい。一人一人と握手をしたり、ジャンケンをしたり、耳元で今日のがんばりをほめてあげたり、一人一人に合った別れ方を心がけたい。



VI 研究の成果と今後の課題

1 成果

- (1) 幼児が教師との信頼関係を築き、安定した園生活を過ごすという事が、人とのかかわりをもつ力が育つ上でもとても大切だということを実感した。
- (2) 人とのかかわりをもつ力が育つ過程をとらえる事ができ、その過程の中で、けんかやトラブルも、幼児の育ちにとって大事な点だという事を認識した。
- (3) 教師の援助の工夫として、一緒に遊ぶこと、言葉かけ、見守り、うなずき、笑い合うなどの一人一人に合った援助をしていくこと。また、子ども同士のかかわりを育てることで友だち関係が深まり、相手を思いやる心も育つという事が理解できた。

2 今後の課題

- (1) 一人一人の育ちの過程に合った適切な援助ができるように実践していきたい。
- (2) 教師の感性を高め良きモデルとなるようにしたい。

おわりに

研修期間中、直接、間接に御指導していただいた宮城久子指導主事をはじめ各指導主事の先生方、いろいろな面で御世話していただいた教育研究所の方々、研究員の皆さん、資料提供など御協力いただいた牧港幼稚園や市内幼稚園の職員の皆様に心より感謝申し上げます。

<引用文献>

- ・東京都台東区立根岸幼稚園 研究紀要 昭和63年度・平成元年度
- ・東風平町立白川幼稚園 研究紀要 昭和62年度・63年度

<参考文献>

- ・大場牧夫 編著 「人間関係」 ひかりのくに
- ・森上史朗 編著 「人間関係」 ミネルヴァ書房
- ・文部省 幼稚園教育指導書増補版
- ・西久保礼造 著 保育実践用語辞典 きょうせい
- ・森上史朗 他 最新保育用語辞典 ミネルヴァ書房
- ・日本幼年教育研究会編 新幼稚園教育要領の内容と解説 明治図書
(編集代表 田中未来)